

大学院生によるアメリカの小中学校での 体験型海外教育実地研究報告

小原友行・深澤清治・朝倉 淳・神山貴弥・岩城宇紀*・武田由紀子*・
長江綾子*・丸子保子**・大里弘美*・為重友馨*・村島唱子*・
林万青也***・Carolyn LEDFORD****・Suzanne HACHMEISTER*****

(2006年11月27日受理)

A Report on Overseas Teaching Practicum by Graduate Students in Elementary / Secondary Schools in the United States

Tomoyuki KOBARA, Seiji FUKAZAWA, Atsushi ASAKURA, Takaya KOHYAMA, Takanori IWAKI,
Yukiko TAKEDA, Ayako NAGAE, Yasuko MARUKO, Hiromi OSATO, Tomoka TAMESHIGE,
Shoko MURASHIMA, Masaya HAYASHI, Carolyn LEDFORD and Suzanne HACHMEISTER

Abstract. This is a report on Overseas Teaching Practicum by Graduate Students in Elementary / Secondary Schools in the United States. As globalization of the society has been accelerated in an unprecedented rate, children in the 21st century need to develop heightened awareness as global citizens; similarly, future teachers need to develop enhanced awareness and skills in teaching young global citizens in the future. For this purpose, Global Partnership School Center, Hiroshima University, launched an overseas teaching practicum by graduate students in elementary / secondary schools in the state of North Carolina, United States. Reviewing the process from pre-program workshop to post-program workshop, a multi-national international collaboration model in education was suggested.

1. 目的・背景

本論は広島大学大学院教育学研究科博士課程前期学生および現職小学校教員によるアメリカ合衆国ノースカロライナ州の公立小・中学校における体験型海外教育実地研究の報告である。

社会のグローバル化が急速に進展する今日、21世紀を生きる子どもたちにはグローバル・シチズンとしての意識が求められる。さらに未来のグローバル・シチズンを育成する教師には国際交流活動に対する意識とスキルを持ったリーダーシップが求められる。広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・センターでは、米日財団の助成を受けながら2005年以来アメリカの教員および教員志望の学生を受け入れ、日本人教員志望学生との交流、学校間国際交流ワークショップの開

催、あるいは附属学校の訪問を通して生徒や教師との具体的な学校間交流を支援してきた。その過程でいくつかのアメリカの小学校や中等学校とパートナーシップ・スクール関係を構築するに至り、小中高教員の相互訪問を実現してきた。さらに真の相互交流を図るために、今回、教員を目指す大学院生（現職教員大学院生、現職教員を含む）を対象に、海外での体験型教育実地研究を実施した。英語を中心とした外国語運用力の訓練を主目的とする海外研修と比べて、今回の実地研究は英語を手段として日本の文化をアメリカの学校で伝えようとする試みである。事前研修から実地研究、そして事後研修までの過程を内省しながら、日米の教育を通した二国間のモデルから、さらに多国間における教育での国際協働のモデルを構築する

*広島大学大学院教育学研究科博士課程前期大学院生, **広島大学大学院教育学研究科研究生,
東広島市立三ツ城小学校, * East Carolina University, ***** Elmhurst Elementary School

ことを目的としている。

2. 体験型海外教育実地研究プログラムの概要

本プログラムの計画および訪問校、参加者は以下の通りであった。

- 1) 期 間 平成18年9月3日(日)～9月11日(月)
- 2) 訪問先 米国ノースカロライナ州内の小学校及びワシントンDC

3) 訪問目的 広島大学大学院教育学研究科授業科目「体験型海外教育実地研究」の実施及び学校間国際交流の推進

4) スケジュール

- 4/11(火) 履修等, 説明会 L304
- 6/1(木) 第1回事前研究
- 6/29(木) 第2回事前研究
- 7/25(火) 指導案(英文)検討及び講演会, 学校間国際フォーラムの打ち合せ
- 7/28(金) 講演会 米国小学校教育事情(TAGとグローバル教育)
- 7/29(土) GPSC学校間国際交流フォーラム(広島県立生涯学習センター)
- 8/3(木) 第3回事前研究 個別研究テーマ(授業実践研究)の交流と協議
- 8/29(火) 第4回事前研究 旅程確認・諸準備他
- 9/3(日) 広島発・経由地・グリーンビル着
- 9/4(月) 事前打ち合せと準備
- 9/5(火) 海外教育実地研究(現地校実習)
- 9/6(水) 海外教育実地研究(現地校実習)
- 9/7(木) 午前 ローリーへ移動
午後 海外教育実地研究(Exploris Middle Schoolでの実習)
- 9/8(金) 午前 ワシントンへ移動
午後 海外教育実地研究(フィールドリサーチ)
- 9/9(土) 終日 海外教育実地研究(フィールドリサーチ)
- 9/10(日) ワシントン発
- 9/11(月) 成田経由・広島着
- 9/29(金) 事後研究

5) 参加者およびグリーンビルにおける配置校

Elmhurst Elementary School

Ms. Suzanne Hachmeister (パートナー校教員)・神山貴弥(引率教員)・武田由紀子・長江綾子・林万青也

Wahl Coates Elementary School

Ms. Cynthia Watson (パートナー校教員)・深澤清治(引率教員)・丸子保子・大里弘美・為重友馨

G. R. Whitfield School

Ms. Pam Justesen (パートナー校教員)・朝倉淳(引率教員)・岩城宇紀・村島唱子

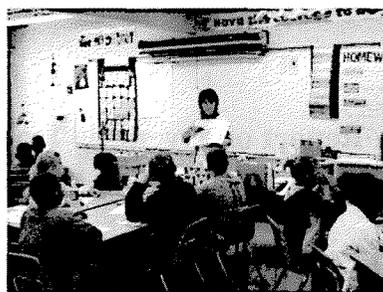


写真1 参加者による授業実践の様子1



写真2 参加者による授業実践の様子2



写真3 参加者による日本文化(民謡)の紹介

3. 参加者の報告

参加者は、現地配置校において、それぞれ事前研修を通して準備した授業を実践した。以下には各参加者が著したこの授業に関する「ねらい」「概要」「成果と課題」、およびこの海外教育実地研究を通してもたらされた「自己変容」についての報告を掲載した。

第8学年 English Language Arts 「Lets take a look at a dollar store in Japan」

教育学研究科学習科学専攻学習開発基礎専修 岩城宇紀

1. ねらい

本授業のねらいは、日本とアメリカの100円ショップの様子や特徴の違いを通して、そこから見えてくる日本での100円ショップに行く目的や日本人の性格について考えてみることである。

2. 概要

まず、アメリカの100円ショップについて、知っているのかを尋ねる。次に、日本の100円ショップの写真を提示し、そこではいったいどのようなものが売られているのかを尋ねる。日本の100円ショップ特有のものを今回持ってきたことを伝え、それぞれがどのように使われているのかをいくつかのグループに分けて考えさせる。

そして、100円ショップで売られているものを使って、その本来の用途とは違った使い方をして見せる。今回は、リングと糸を使って手品をすることと、スノコを使って作られたラックの写真を提示することを行なう。その後、100円ショップの商品を使っていろいろなアイデアを得ることができるということを伝える。

最後に、今回の授業の感想を聞き、日本における100円ショップのイメージや日本人の性格等について考えさせる。

3. 成果と課題

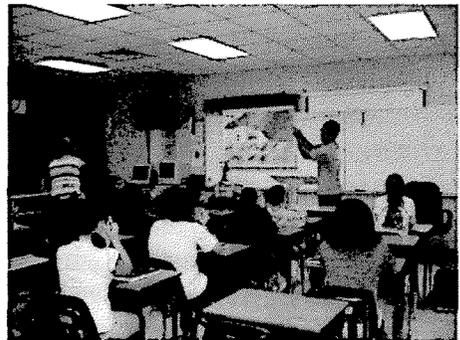
日本とアメリカの文化や習慣の違いが、100円ショップに映し出されているのではないかと考え、それをアメリカの子どもたちに伝えたいと感じ、今回の授業計画を立てた。事前に100円ショップに行き、いろいろなグッズを購入した。

実際の授業では、日本で購入した100円ショップのグッズを見せて、どのようにして使用するのかというクイズを出し、グループに分けて考えさせるところまでは順調に進んだが、日本人はなぜ100円ショップに行くのかというまとめの部分と、生徒それぞれの感想を聞くところまでは時間が間に合わず、最後まで終えることができなかった。また、考えた通りに進んでいるときはよいが、予期していなかった質問や意見が出てくると、うまく対応できなかった。もう少し文化的な相違という点について考えさせたかったが、結局100円ショップの紹介で終わってしまった感があつた。

しかしながら、生徒たちは100円ショップのグッズの考えてもみなかった使い方を目の当たりにして、とても驚き、関心を持っていたので、そこはうまくいったと考えられる。また、生徒は授業中、とても集中しており、私のつたない英語を一生懸命聞こうとする姿勢が見られ、感心した。しかしながら、自分自身が思っている以上に、文化的な違いを伝えるということはなかなか簡単なことではないと感じた。「この表現で理解してもらえらるだろう。」と考えていたが、実際はよく理解してもらえなかったという場面が多いようであった。

【自己変容について】

アメリカにおいては、教師の力というものが絶対的で、教室では先生が話し出すと、子どもたちはすぐに静かになり、また先生の言ったことに対しては絶対に従っているようであった。そして、教師自身は、教師という仕事がとても好きで楽しんでいると感じた。仕事内容も自分の仕事が決められており、日本のように学校内のいろいろな役割を受け持つということはないようであった。実際に仕事は忙しそうではあるが、自分の時間を大切に、オンとオフというものははっきりと区別できている。今回の研修では、教師に対するイメージが変わった。



第3学年 異文化理解「Challenge! Japanese Onomatopoeia!」

教育学研究科学習科学専攻学習開発基礎専修 武 田 由紀子

1. ねらい

本授業の主なねらいは、アメリカの子どもたちに、身近なもの、今回は擬態（声）語・擬音語（以下、オノマトベとする）を取り上げ、日本について興味をもってもらうことである。

また、日本語はオノマトベに富む言語であると言われており、国語の授業においても取り上げられることは多いが、海外では学習する機会は少ないと言われている。そこで、オノマトベを題材にすることで、自国のオノマトベについても興味を喚起することができるのではないかと考えた。

2. 概 要

授業の前日、子ども達は担任教師によって“onomatopoeia”という言葉进行学习しており、さらに、授業直前に、一教師がオノマトベに関する絵本を朗読し、子どもたちの関心を高めた。

導入は、ある絵とその絵を表すオノマトベを提示し（びしょびしょ・がやがや・わんわん）、どの絵がどのオノマトベに一致するかを推測し挙手するという活動を行った。ここでは、日本語のオノマトベへの興味の喚起を行い、英語との違いに気づかせた。

展開は、10種の動物の絵（犬・猫・ねずみ・鶏・蛙・アヒル・馬・羊・牛・豚）を用いて、英語では何と鳴くかということを探ねた後、日本語ではどう鳴くかを予想させた。犬に関しては導入段階で学習しているので、全員が答えることができた。また、比較的似ているものや、聞いたことのある鳴き声（鶏）は答えることのできる子どももいた。一方で、今までに聞いたことがないような動物（羊や馬）の日本語の鳴き声に関しては、英語との大きな違いに驚いた様子であった。一通りの動物の鳴き声进行学习した後、クイズ形式にして復習した。

まとめとして、オノマトベカルタを行った。オノマトベカルタは、動物の絵札を床に置き、日本語の鳴き声を読んで絵札を取るというものである。カルタを配布した後、ルールを説明してゲームを始めた。ゲームが進行していくにつれ、子どもたち自身でルールを作り、カルタを読まれるまでは手を上に挙げておくなどして、楽しんで活動していたように見えた。

3. 成果と課題

オノマトベや遊びという身近なものを題材として設定することで、子どもたちが楽しみながら日本文化に触れることができたように感じられた。展開・まとめでは、どの子どもも積極的に授業に参加し、日米のオノマトベの違いに度々驚いた様子を見せた。カルタ遊びは今回が初めての体験で、絵札を取る際の「ハイ」という声に興味を持ったようで、何度も繰り返し発していた。

課題として挙げられるのは、本授業では、全体的に教材に頼りきってしまい、指示が上手くできなかったことである。指示や発問というのは、国に関係なく、授業を展開していく上で重要であるということを再認識した。カルタ遊びに関して言えば、最初にルールを細かいところまで指示していなかったために、各グループでルールが違うという場面も見られた。学級全体で共有する必要があるものについては、目で見て確認できるように模造紙に書いて前に提示するべきだと感じた。

今回は日本に興味を持ってもらうという目的で授業を行ったが、日米でなぜこのような違いがあるのかということについて授業内で触れると、さらに深い学習となると考え、今後の課題としたい。

【自己変容について】

本研修において最も感じたことは、自らのコミュニケーション能力の低さである。語彙や表現方法を知らないだけでなく、伝えることに臆病になっているだけだということを感じ、今後身につけてゆく必要がある。これは、国際化の進む社会においても同様のことが言え、表現する力と相手の文化や慣習を受け入れる態度を育成することで、異文化間の相互理解を行うことができるのではないだろうか。また、アメリカの教育に学ぶところは多く、教師の協働やmoral educationなどを取り入れ、さらに日本の教育を高めていくことができれば良いと思う。

第3学年 道徳「『Think』すると『Thank』がみえる —感謝の表現：日本とアメリカの食習慣から—」 教育学研究科学習科学専攻学習開発基礎専修 長 江 綾 子

1. ねらい

本授業のねらいは、食習慣を通じて日本とアメリカの相違点や特徴に気づくということである。

食事は世界共通の日常生活習慣であり、食事内容・食事のマナーなど、国や地域によって特徴がみられる。その国や地域に住む人にとって、それらは日常であり強く意識することはあまりないが、他国他地域との違いを知ることで自国について意識することになる。今回の授業では、食文化の中でも食事のマナー（挨拶）「いただきます」「ごちそうさま」を取り扱うことにした。

授業を考えるにあたり、日本とアメリカの違いや特徴をみていくが、行為や対象とするものに違いや特徴があるにしても「感謝をする」という点では同じであることに気づく・考えるということを強く意識した。このことは、普段習慣として何気なくしている行為も、もともとの意味を知る・その行為について考えることによってみえてくるものである。このことは、食文化以外にも同じことが言えるであろうし、また、さまざまな国においても言えることから、今回をきっかけに自分の国や地域の文化について考えるきっかけにもなればと考えた。

2. 概要

最初にDVDと写真を使って日本の小学校の給食場面を提示した。日本の子どもが配膳のためにエプロンとマスクをしている姿、その日の給食メニューには特に興味を持っていた。

その後、「いただきます」の意味について考えていくために、メニューに使われている食材について子どもたちに聞いていき、出た答えの食材をホワイトボードに貼っていった。その食材が成長していくために必要となるものについて尋ねたところ、牛や豚が食べるえさという回答はすぐ出たり、複数人答えていたりしたが、日光や水・空気などは出にくく、これらを動植物が必要とするものとして提示しても、考えにくかったのか、反応はあまりなかったように思う。最後に、日本で食事をするとき言う「いただきます」はこれらすべてに対する感謝であり、その中でも特に「命をいただきます」としての意味が本来の意味であるということを伝え、自分の国や家ではどのような習慣があるか、それにはどんな意味があるのだろうか、形は違っていても「感謝をする」ということはどの国でも共通する重要なことではないか、ということについて説明・コメントし授業を終えた。

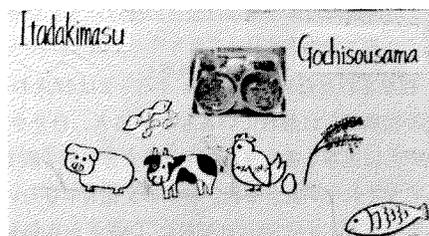


写真 授業の板書

3. 成果と課題

設定学年を小学校高学年～中学校としていたが、実際は小学校第3学年で、時間も予定の約半分であったこともあり、子どもがイメージしやすい言葉がけや発問、教具の提示をすることができず、一方的に説明し、まとめてしまう授業であった。授業を通じて、同じ題材でも対象に合うように指導方法を工夫すること、具体的なものや「生」のものを提示すること、シンプルに考え構成することの重要性を学んだ。また、私自身も日本やアメリカの文化について学ぶ貴重な機会であった。

【自己変容について】

これまで、「異文化理解」に対して、どこかそれ自体が単独の目的のような印象があった。しかし、今回現地を訪問し、さまざまな人と出会い、親しくなったことによって、その人をより理解したいと思うようになっていった。そして、これが異文化理解の大きな動機づけとなり、人とのつながりと異文化理解が大きく関連していることを肌で実感したことは自分自身にとって貴重な経験であり変容であった。また、現地の参考となる取り組みを日本でも活かしていくために、今回の訪問で気づいた日本のよさをより活かしていくために、まずは日本のことを理解する必要性を感じた。そして、日本においても人とのつながりを大切にしていきたいと感じている。

第5学年 総合的な学習「大好き 広島！」

広島大学大学院教育学研究科 研究生 丸子保子

1. ねらい

授業の題を「We love Hiroshima!」とし、副題を「We tell you our favorite places and things in Onomichi and Mihara.」として授業を行った。ノースカロライナの子も達が①尾道や三原のお薦めの所や事物について知ること ②知ることを通して、広島や日本に興味・関心が持てるようにすることを授業のねらいとした。

2. 概要

授業に入る前に、簡単な自己紹介を行った。どんな思いや目標もってノースカロライナにやってきたかを子どもたちに伝えた。その後、

○Step 1 世界地図を使って、アメリカやノースカロライナの位置や、日本や広島の位置を確認した。

○Step 2 子どもたちに「日本」とか「広島」と聞いてどんなことをイメージするか尋ねた。すると、

・ Answer from child 「I think about like ... the big towers like you have and like great trees about ...」

・ Answer from child 「I think about Mt. Fuji.」という返事があった。アメリカやノースカロライナの広さや人口について日本と比べながら、また、子どもたちの知っている（かもしれない）自動車産業や企業名に触れ、アメリカと日本とが強く結びついていることを伝えた。

○Step 3 日本地図や広島県地図を使って、日本や広島、尾道・三原の特徴や様子を簡単に伝えた後、三原の子ども達のお薦めの場所や出来事（行事等）を絵や写真で紹介した。その後、尾道の小学校で行われた総合的な学習の中で、日本の伝統・文化に関わるもの等をビデオで紹介した。

○Step 4 日本から持ってきた手紙を読んだ後、日本の友だちに返事を書くかたちで今日の授業の感想を求めた。（時間の関係で返事は翌日の受け取りとなった。）

3. 成果と課題

授業を行ったWhal-Coates 小5-2は27人のクラスで、そのうち21人の返事を受け取った。その中で日本（文化や伝統等）に触れているものが15人、自分やノースカロライナの紹介のみのものは6人であった。三原や尾道の友だちに返事を書こうということで書いた手紙であったが、多くの子どもたちが日本や広島のことにも触れ、興味をもって来ていた。また、日本の文化も学びたいし、自分たちの文化も学んでほしいと述べている子どももいて素晴らしいと感じた。中には手紙に「What is it like in Japan?」と次の返事を求めるとも思える内容もあったし、「Our culture is very very different from yours.」と文化の違いをきちっと見取っている子どもが「I would like to see the cherry blossoms.」と結んでいたものもあった。「一期一会」のような、最初で最後の授業であったが、子ども達の多くは日本や広島に興味・関心を示してくれた。いつの日か日本を訪れてみたいとも書いてくれた。この子たちも外から故郷をみたとき、強くアメリカやhometownを意識するにちがいない。同じように日本の子どもたちも新たな目で日本や郷土を意識するであろう。そういった意味からも多くの方々に門戸を開き、学びの機会を与えていただきたいと願い、益々のGPSCの発展を祈念している。

【自己変容について】

「一人の子どもも後に残さない」教育を学校長は強く語られた。環境や条件、状況等によって学校教育に求められるものの優先順位は変わるが、子どもを思う気持ちはノースカロライナも広島も、アメリカも日本も変わりはない。先生方は子ども達を目の前にして寸暇を惜しむように動かれていた。この度の「体験型海外教育実地研究」はノースカロライナのよいところを出来るだけたくさん見つける旅でもあったが、それは取りも直さず日本の伝統文化だけでなく、日々の生活を外から見つめる旅でもあった。ただ漫然と過ごしてきた時間や環境について、広く深く見直す機会を与えられたと感謝している。アメリカにも元気な子ども達の日常があった。

第4学年 図画工作(アメリカ)・第5学年総合的な学習の時間(日本)「絵手紙を描こう」
教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 大里 弘 美

1. ねらい

絵手紙は絵とメッセージで気持ちを伝える手紙やはがきのことである。絵手紙の学習材としての教育力として山崎歩は、「1 伝統的な力, 2 国際的な力, 3 コミュニケーション能力, 4 心の育成・個性に関する力, 5 集中力と根気¹⁾」の5つを示している。

この「伝統的な力」と「国際的な力」という観点から、絵手紙は日本文化の一つと捉えることができる。絵手紙を描くことをアメリカの児童が体験することで、日本文化の体験となると考えた。また、日本の児童が、アメリカの児童が描いた絵手紙を通してアメリカの生活や文化に触れ、アメリカの生活や文化に興味・関心を持つとともに、日本の生活や文化を認識する機会となると考えた。文化的シンボルを基にしたコミュニケーションによって、自他の文化の相違を効果的に気づかせることをねらいとした。

2. 概要

Wahl Coates E. S. では1時間(60分)の授業をいただいた。題材決定に時間がかかると予想されたため、前日にワークシートを配布し日本の児童にアメリカの文化を伝える絵手紙の題材を考えさせた。授業では、絵手紙の特徴について説明し、絵手紙を描く練習として、全員が「りんご」を題材に筆の持ち方、絵手紙の描き方の練習を行った。その後、それぞれの児童が考えてきた「自分の文化」の絵手紙を描いた。

日本の授業は5時間行った。導入でアメリカの児童に親近感を持たせる目的でアメリカの学校生活のビデオを見せた後、アメリカの児童の絵手紙を提示し、日本との相違点や類似点を考察した。その後、アメリカの児童に送る絵手紙を作成した。

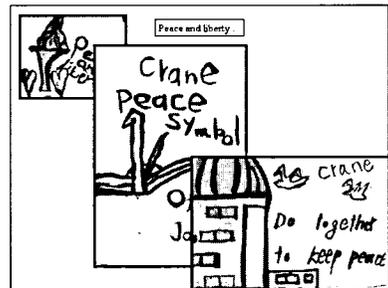


図1 アメリカと日本の児童が描いた「平和」をテーマとした絵手紙

3. 成果と課題

アメリカの児童の授業後の感想を分析した結果、19人中3人が「絵手紙を描くことが難しかった」と受け止めていた。その内2人が「絵手紙を描くことが難しい」と答え、残り1人は、「宿題で絵手紙の題材を考えることが難しい」と答えていた。これは、時間の制約のため、十分な説明なくアメリカの文化についての題材を宿題で考えさせたこと、授業では、絵手紙の説明と描き方の練習、絵手紙を描くことの3つの活動を1時間に行ったことが原因していると考えられる。しかし、8割近い児童が「楽しかった」と答えており、「これからも絵手紙がしたい」という児童もいた。

日本の児童は、アメリカの児童の絵手紙を見て、「アメリカにも平和を祈る気持ちがあることが分かった。」「昼食や夕食によくサンドイッチを食べるそうだが、自分はあまり食べない。」など共通点や相違点に気づいていた。このことは、絵手紙に描かれた異文化を通して、自文化を見つめ直すことにも繋がった。

【自己変容について】

Wahl Coates E. S. での授業実施では、授業を実施するに当たって必要な諸準備や事後指導を行うことが難しいという日本におけるALTの思いを理解することができた。また、Wahl Coates E.S.とExploris M. S.の学校経営や学習形態の違いから、それぞれの学校が、児童・生徒の実態に応じた教育方針を創意工夫していることを感じた。日本でも、学校・地域の実態に応じた学校経営が求めている。これからの学校経営や学習形態を考えていく上で、Wahl Coates E. S.とExploris M. S.の大きく異なる学校経営や学習形態は参考になるものであった。

1 山崎歩「図画工作科における【絵手紙】の学習材としての可能性」広島大学学術論文2005

第4学年 レクリエーション「Bingo of Japanese!!」

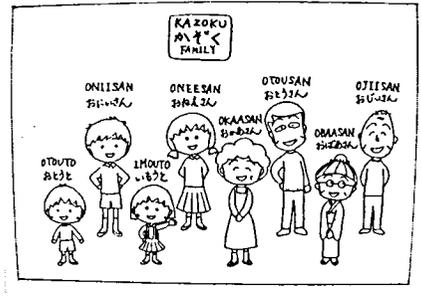
教育学研究科生涯活動教育学専攻音楽文化教育学専修 為重友馨

1. ねらい

本授業のねらいは、アメリカの小学生達に、身近で覚えやすい簡単な日本語を紹介することによって、日本語に親しんでもらい、日本の文化や習慣について興味を持ってもらうことである。

2. 概要

まず、私自身の自己紹介をし、授業内容を伝えた後、子供達とのコミュニケーションをとった。次に、家族・学校・日本文化に関するイラスト付きの日本語を書いたプリントを配り、一つずつ発音しその単語の説明をした。説明はカテゴリー毎に区切り、説明終了後子供達と一緒に発音練習を行った。私が日本語の説明をしている時点で、生徒の方から自発的に私の後に続いて日本語を読む声が上がることもあり、とても興味を持って説明を聞いてくれた。発音練習の際も元気にしっかりと発音してくれていた。また、紹介する日本語は、全部で22個の単語を用意していたので、生徒が飽きない



ように、時には近くの生徒に話しかけてコミュニケーションをとり、その単語に関する私のエピソードを入れながら説明を進めていった。続いて、ビンゴシートと、これまでに紹介した日本語が書かれた22枚のカード（イラスト付き）を配った。生徒は、その中から好きなカードを9枚選び、それをビンゴシートに貼り付け、各自でオリジナルのビンゴシートを作成した。そして、ビンゴゲームの説明をし、ゲームを始めた。ビンゴゲームを始めると、生徒の興奮も増し、私が提示する日本語を聞き取っては自分のシートの中で探し、比較的短時間のうちにチップを置いたり残念がったりする反応を示してくれた。景品は、湯飲みや折り紙、箸などの日本の物を用意していたが、すぐに足りなくなり、担任の先生の計らいで、景品にキャンディーを追加してゲームを続行した。

3. 成果と課題

生徒たちはとても素直で、新しいことであれば何にでも興味を示し、日本文化に対しても関心を持ってきていた。それぞれの単語の説明を聞くとときや、ビンゴシートを作成する活動においても、常に熱心に取り組んでくれた。今回の授業のねらいは、「アメリカの子供たちが日本語に親しむこと」としていたので、その目的は十分に達成されたと感じている。しかしながら、ビンゴゲームでは、私がある一つの単語を選んで生徒に提示する際に、そのイラストを示しながら提示したので、中には日本語を聞き取りながらゲームをしたのではなく、私が示すイラストと自分のビンゴシートの中のイラストを照らし合わせてゲームをしていた生徒もいたかもしれない。今回は30分間という短い時間での授業となったので、分かりやすいようにイラストを活用し、日本語といってもひらがなではなくローマ字を読んだに過ぎないが、それでも生徒たちはしっかりと日本語を発音し、読みの練習やビンゴゲームを通して、日本語やその独特の響きを体感し親しむことができたのではないと思う。また、授業後には、景品の箸を両手に持ちながら「Thank you!!」とわざわざ言いに来てくれる生徒や、授業後のランチタイムの時間にカフェテラスまで景品の湯飲みを持って行き、湯飲みで水を飲もうとしていた生徒もおり、用意していた景品もとても喜んでもらえたようである。

【自己変容について】

言いたいことや聞きたいことを上手く伝えることが難しかったり、相手の言葉を十分に理解することが出来ずにもどかしい思いをしたことが多々あったが、それでも少ない語彙で何とか授業をやり遂げたことは私にとって大きな自信となった。授業中に生徒たちと会話を交わしたことでコミュニケーションの楽しさに触れ、文法間違いや発音間違いを恐れず、まずは言葉に出して相手に伝えようとするのが国際交流の基本であり醍醐味であるということを実感した。また、他文化に触れたことで、自国である日本の文化や習慣を見つめ直すようになった。

第7学年 音楽「日本民謡（沖縄民謡）を体験しよう」

教育学研究科生涯活動教育学専攻音楽文化教育学専修 村 島 唱 子

1. ねらい

本授業のねらいは、日本民謡を体験することで、日本を知ってもらうと同時に、日米の音楽の違いを感じ取らせることである。沖縄民謡の中でも、教訓的な歌詞をもちメロディアスな「ていんさぐぬ花」を選び、歌詞に込められた親子の絆など、人々の思想を強調することにした。さらに、沖縄民謡の特有な音階を三線で示し独特の響きを理解させ、伴奏楽器である三線に関する説明や、民謡が世代から世代へと歌い継がれ、歌い手によっても歌詞が違っており、何番にも渡り増えていったこと等について教えることで、より日本民謡に興味をもたせたいと考えた。また、アメリカの民謡であるフォークソングについて生徒にアンケートを取ることにした。

2. 概 要

第7学年のアメリカの生徒たちは、歌詞朗読や歌唱など積極的に声を発し活動した。日本のことや日本語の音楽に興味津々で、三線を紹介すると大きい反応を示した。三線は見たことも聞いたこともない楽器で最初は戸惑いもあったようだが、チューナーを使用し調弦をしてみせるとギターの調弦のようであり撥もピックと似て、すぐにその音色や三線の伴奏によって繰り広げられる沖縄民謡に惹き付けられ親しんでくれたように思う。授業前、配布する楽譜を読むことができるのか心配だったが、生徒たちは皆すらすらと読譜し、一般音楽の教育も盛んであり教育水準の高さに驚いた。



第7学年の生徒と授業者～授業後

3. 成果と課題

全体的に、生徒たちは真剣に説明を聞き、大きな声で歌唱していた。授業後の感想で、日本語や日本の音楽について触れることができたことは、アメリカの生徒たちにとって有意義だったと聞いた。また、「ていんさぐぬ花」のゆったりとした美しいメロディと三線の独特な響きに大変興味・関心をもち、沖縄民謡の中でもこの曲を題材に用意したことは良かった。

しかし、生徒たちは日米の音楽が違うということは理解したが、日本民謡の歌詞がもつ教訓的意味合いや味わいまで深く理解させるには、30分の授業時間内では不十分であった。民謡とはどういう音楽であるか、日常生活の中から考えさせる時間を設け、その意味や日米の民謡の違いを認識させると良かったのではないかと考える。

フォークソングに関するアンケートの結果から、生徒たちのフォークソングの捉え方が日米では異なることが分かった。アメリカの子どもたちにとって、フォークソングは歌詞内容に物語・神話を含み、小さい頃に聞いた音楽であるということ、さらに曲と一緒に歌い、合わせて踊りもする音楽であるということである。しかし、日本と共通する部分では、親から子へと歌い継がれるもの、人々の生活を映す鏡のようなものであるということだ。

【自己変容について】

今回初めての渡米で、アメリカ人の肌や目、髪の色は様々であるが皆同じアメリカ人である、ということに改めて驚いた。しかしアメリカ人にとって、それらが違うことは当然であり、だからこそ主張し合いながら互いを認め合い、尊重し合っている。日本人である私は、状況判断において暗黙の了解であるとかアイコンタクトで済ませるなどしがちであるが、表面的な行動だけを見て人物を判断すべきではなく、積極的に意思表示し、コミュニケーションをとることが重要である。日本のことをもっと知りたい、日本を訪れてみたいという感想をもった生徒もおり、国が違い言葉は異なっても、交流しようという気持ちをもって行動に移すことがとても大切であると強く感じた。人との関係を大切にしながら、これからも積極的に交流を深めていきたい。

第3学年 RAKUGO「JYUGEMU」～JAPANESE COMIC STORY～

東広島市立三ツ城小学校 教諭 林 万青也

1. ねらい

本授業のねらいは、日本の伝統的な娯楽文化である「落語」の存在とその面白さをアメリカの小学生に紹介することである。

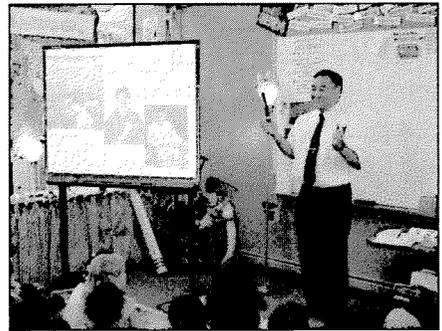
特に、次の2つの点を中心に据え、落語の面白さを少しでも伝えられたら良いと考えた。

- ① 人々の日常から「落語」の笑い話ができているということ。
- ② 「落語家」という話し手が、小道具を使いながら聞き手に伝えているということ。

2. 概要

「起立」「礼」「お願いします」の号令

- ① 落語を行う「場」の雰囲気をつかませるためプロジェクターで「寄席」や「落語家」の写真を拡大して写して見せた。
(写真1)



〈写真1〉

- ② 落語家が話を分かりやすく伝えるために小道具を使っていることを紹介し、実際に「扇子」と「手拭い」を用意し、クイズ形式で「何をしているところか」を当てさせながら、それらの使い方を説明した。
- ③ 「寿限無」の名前を（漢字）（ローマ字）で書き、それに英語で意味を説明したカードを掲示しながら、子どもたちと「寿限無」の名前を言う練習をした。
- ④ 「寿限無」のさわりとまとめの部分を中心に、長い名前に振り回される面白さが伝わるように、スクリーンに映る絵に合わせて話をした。
- ⑤ 「手拭い」と「扇子」をプレゼントし、みんなで「落語」に挑戦してもらいたいということを伝えた。

3. 成果と課題

- 落語の小道具の紹介にクイズ形式を取り入れたことは良かった。閉じたままの扇子が、剣になったり、たばこになったりすることに大変興味を持って見て、答えてくれた。身振り手振りだけでなく、人に伝えやすくするための工夫があることも理解してもらえたと考えている。
- 第3学年ということを考えて、伝える話の内容を絞り込んだことも良かった。言葉のリズムや、繰り返しの面白さが伝わる範囲に限定したことで、子どもたちも分かりやすかったのではないかと考えている。
- 古典落語の場合、時代背景を理解してもらうことが難しい。日本の歴史や文化がある程度理解できる年齢であれば可能なことも、小学生には無理なことが多い。着物や生活スタイルについて少し説明を加える必要があったと思う。

【自己変容について】

自分の思っていた「陽気で親しみやすい」というアメリカの子どもたちに対するイメージが、「礼儀正しく真面目である」というイメージに変わった。また、声に出して話すこと・言葉で伝え合うことの大切さを改めて感じる事ができた。私が今関わっている教育の現場だけに限らず、社会全体が「ありがとう」や「素晴らしい」を相手に伝え合える環境を整えていかなければいけないと考えるようになった。

4. 体験型海外教育実地研究についての評価

(1) 大学院生等による授業についての評価

米国ノースカロライナ州において実施された授業の一覧は次のとおりである。

	学年	教科等	題材・テーマ
A	3	総合	異文化理解 “Challenge! Japanese Onomatopoeia!”
B	3	総合	RAKUGO “JYUGEMU” ～JAPANESE COMIC STORY～
C	3	道徳	“Think”すると“Thank”がみえるー感謝の表現：日本とアメリカの食習慣からー
D	4	図画工作	絵手紙を描こう
E	4	特別活動	レクリエーション “Bingo of Japanese!!”
F	5	総合	大好き 広島!
G	7	音楽	日本民謡（沖縄民謡）を体験しよう
H	8	総合	English Language Arts “Lets take a look at a dollar store in Japan”

(教科等名は日本の教育課程における名称を当てはめたものであり、授業を実施した当該校にとってはいわゆる投げ入れの授業となっている。)

教科等の選択、題材・テーマは、参加者に任されている。学年についても参加者の希望にそったが、受け入れ校との関係で必ずしも予定どおりとなっていない。参加者は、日本での事前学習において協議を重ね、出発前に教材及び英文の指導案を作成し、現地に持参した。現地では受け入れ校関係教員と短時間の打ち合わせを行い、授業に臨んだ。参加者は、基本的に通訳を介すことなく英語で授業を実施した。

外国において現地の子どもたちに日本語以外の言語を用いて授業をすることには、様々な制約が伴う。しかし、このことが、授業構成に不可欠なことであり、それを厳しく峻別する作業に繋がりが、実践的指導力を向上させている。授業を通じた主な成果は、次の3点に整理できる。

① 教育内容の厳選

制約のある中での授業は、教育内容の厳選を必

要とする。参加者はその作業を進める中で、内容を深く検討することができた。選択された内容については、日米の相違点だけでなく共通点も学ぶように計画されている。(例えば、表内C,D,G)

② 子どもの立場からの教材開発

参加者は、選択された内容に対してどのような教材が適切なのかを、子どもの立場から吟味することができた。(例えば、Aのオノマトベ、Bの落語、Cの給食、Dの絵手紙、Eのビンゴ、Gの三線、Hの100円ショップ)ただ、子どもの実態を直接把握することができないため、想像力に頼る部分も多かった。結果的には、これが参加者の「問い」となって、参加者自身の国際理解を促進している。

③ コミュニケーション等、指導法の工夫

英語での授業は、言葉以外のコミュニケーションの重要性を再認識することにも繋がっている。母語である日本語での授業は、言葉によるコミュニケーションに頼りすぎてしまうこともある。しかし、実際には言葉以外に多くの手段があり(例えば、Fの絵・写真・ビデオ、Gの落語における動作)、重要な働きをしていることを参加者が実感することができた。また、日本での日本の子どもたちに対する授業と関連付けて成果を上げている授業(D、F)もみられた。

このように、わずか1～2時間の授業実践であったが、参加者の授業構成力、実践的指導力の向上をみることができる。もちろん、個々の授業には、授業としての課題もあるが、参加者自身がそれを認識していることは、むしろ成果として考えることができよう。

(2) プログラム全般に関わる評価

冒頭でも述べたように、本研修の主目的は外国語運用力の訓練ではなく、現地校での授業実践を含む教育現場体験・異文化でのフィールド・リサーチを通して、教員としての資質・力量を高めることであった。特に、社会のグローバル化が進む中、未来のグローバル・シチズンを育成する教師としての意識やスキル、リーダーシップ性の向上を図ることが本研修の大きなねらいであった。

この点に関して参加者の「自己変容」に関する報告から、主に次の3点においてグローバル・シチズンの育成につながる意識の変化や再認識があ

ったことがわかる。

① 自国についての理解の大切さ

今回、授業実践あるいは日常的交流場面を通して、多くの参加者は日本の文化や習慣について紹介し、アメリカのそれとの相違点や類似点を考える機会を得た。こうした機会を通して、相手国の理解をするためには自国の理解が不可欠であること、また自国のよさが改めて浮き彫りになることを認識したとの報告が多くあった。

② コミュニケーションをとることの大切さ

実際に授業実践をする、あるいは現地で教員や子どもたち、学生と交流するという場面に数多く遭遇する中で、参加者の多くからコミュニケーションをとることの大切さ、特に積極的に言葉や身ぶり・手ぶりを通して自分の思いや考えを表現することの大切さを学んだとの報告があった。

③ 人とのつながりの大切さ

今回、現地での教育現場体験やフィールド・リサーチを通して、参加者は実際に様々な人と出会い、その人たちと親しくなることを通して、その人を理解したいという思い、ひいてはその思いが異文化理解に繋がることを学んだとの報告があった。

①②③であげた参加者の自己変容は、異文化理解の基盤となる認識であり、グローバル・シチズンとしての意識にもつながるものといえよう。今回は移動も含めわずか9日間という短期の研修であったが、このプログラムに組み込まれた現地で他国の子どもに授業実践をするという貴重な体験およびそのための事前研修、そして現地教員との交流がこうした認識を強くさせたと考えられる。このプログラムの参加者のこうした認識レベルの変化が、今後、教育現場でのグローバル・シチズンを育成する行動に繋がり、この分野におけるリーダーとして活躍されることを強く期待する。

なお、本プログラムをより発展させていくための反省点としては次の2点があげられる。まず第1には、事前学習に比べて事後学習が占めるウェイトが小さかったことである。この研修の成果を個人の経験に終わらせず上記したような行動へ結び付けるため、また訪問した日米間だけではなく他の異文化間の問題として捉えるためには事後学習の充実が欠かせない。また、今回の訪米時期は現地校の新年度がスタートした直後であったため

に、準備の面でもまた現地学校の通常の様子を観察するという面でも困難な点があった。次年度は、実施時期の変更を検討する必要がある。

(3) Hiroshima University and East Carolina University Partnership: More than Friendship By Carolyn Ledford

Each time an email arrives, a visit is planned, or a paper is submitted, the history of the Global Partnership Schools (GPS) is expanded. In September when the Hiroshima group arrived, it was a time of excitement and reflection. With the large number of teachers, university students, and university faculty that have visited each location friendships have developed. Each visit provides a time to bring all previous participants together to remember and expand on projects. This enables each to continue former relationships and to develop new relationships to further the Global Partnership Schools.

However, the partnership is more than friendships as aspects of developing a global orientation are enhanced by the visits. The impact has not created a mirror for each to see their reflection, but instead has provided growth of perspective consciousness, cross-cultural awareness, and knowledge of education in a different culture. With the emphasis on partnerships between schools and universities, the strength is on the growing global understanding provided by the GPS.

The greatest growth is when collaboration takes place and each listens to the other. As a result, all parties grow in global understanding. In addition, the impact provides for teaching experiences for K-12 and university students when the parties return home.

The greatest challenge relates to scheduling. The most recent trip coincided with open house at the K-12 schools and the beginning of the semester for the university. Although much can be observed at the opening or closing of the school year, observations that are more beneficial for all parties would be at a different time in the school / university

calendar. Additionally, due to the timing East Carolina University classes were not visited. These visits serve to enhance global understanding for our undergraduate and graduate students.

“We are all one people under the same sky” (Misonou Elementary School, 2001) reflects the best of the Global Partnership Schools.

(4) Global Partnership Study Tour-September 2006

By Suzanne Hachmeister

The Global Partnership visit by Hiroshima University faculty, graduate students, and local area teachers was a huge success! This group visited in early September, 2006 at the beginning of our academic school year. The Hiroshima group was welcomed by East Carolina University professors and local Pitt County Schools’ teachers---all former participants in Global Partnership Exchange Projects. Hiroshima participants were provided with professional and cultural experiences during their stay. The group toured the East Carolina University Campus and other Greenville sites, including several of Pitt County Schools’ elementary schools.

The participants were divided into small groups and assigned to various elementary schools to spend time observing and even teaching. Each small group included a Hiroshima University lead professor and graduate students and teachers. The group assigned to Elmhurst Elementary included Dr. Takaya Kohyama, Mr. Masaya Hayashi, Ms. Ayako Nagae, and Ms. Yukiko Takeda.

Initially this group enjoyed a tour of Elmhurst and opportunities to observe in several classrooms including kindergarten, second, third, fifth grades and an exceptional class. Special arrangements were made for the participants with special interests of study to meet with other educational specialists. For example, a couple of participants met with the school counselor to observe her lessons and discuss character education and one participant went to a meeting at Pitt County Memorial Hospital to interview a teacher at the Children’s Hospital.

The participants visiting Elmhurst were involved

in “U.S. / Japan Culture Day” with Mrs. Claudia Harris’s third grade class on their final day at Elmhurst. The participants each taught a lesson to the class sharing Japanese culture. The third graders were taught “A Feeling of Thanks,” “Rakugo, Japanese Comic Story,” and “Challenge! Japanese Onomatopoeia.” Lessons were also provided by Mrs. Harris and Mrs. Hachmeister.

The experience was so valuable for the children, as they will never forget the day the visitors came from Japan! The children were blessed with the cultural richness and the teaching expertise of the Japanese participants. Similarly, the participants benefited by learning that pedagogy is the same in any language and children are innately the same--no matter what the culture. The project could have been improved if the visit had been scheduled a week or two later as this was a very difficult time for the local teachers and professors due to the opening of the new academic school year.

As is true of most comparative culture studies, a person learns as much about themselves as they learn about the new culture. As professional educators, the US teachers and Japanese teachers shared their enthusiasm for teaching and love of children with one another. We inspired one another to continue the sometimes overwhelming task of educating the young people of the world!

5. おわりに

今回の体験型海外教育実地研究は、米日財団の研究助成を受け、小原・深澤・朝倉・神山の4名が共同で2005年4月1日に創設した広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・センター（略称はGPSC、通称は「ドナルド・スペンス・センター」）の企画・運営の下、大学院教育学研究科博士課程前期の選択授業科目として初めて実施したものである。センターの目的は、将来学校間連携などのグローバル・パートナーシップを推進するリーダーとなる人材を育てることや、そのために必要な多様なプログラムを開発することであるが、その観点からみた成果としては、次の3点を指摘することができよう。

第1は、参加者の大半が既に教員免許を持ち、

これから優れた教員を目指している大学院生および現職派遣教員であったこともあり、教員としての実践的指導力の向上を図ることができたことである。特に、日本文化に関する教材を開発し、それをアメリカ合衆国ノースカロライナ州の公立小・中学校において英語で授業を行うという体験や、現地での経験豊富な教師の授業を直接見学するという経験は、グローバル化時代の教員となるためにも貴重な学習であったと考えられる。

第2は、現地の教員の献身的なお世話と、彼女らの趣旨を十分理解した上での優れた実習指導によって、日米間の国際交流の重要性や、それを推進するためのグローバル・パートナーシップの必要性に関する理解を図ることができたことである。短期間であっても、参加者との間で、強い人的ネットワークが構築されたと考えられる。

そして第3は、体験型海外教育実地研究の企画・実施・評価の過程を通して、グローバル・パートナーシップを推進するリーダーとなる人材を育てるための一つのモデルとなるプログラムを開発することができたことである。今後は、これを更に吟味・修正していくことが求められる。

今後の改善点としては、2点指摘することができる。一つは、実施時期の問題である。今回は、実施が9月初旬ということもあり、新学期開始のあわただしい時期で、現地の学校に多大の迷惑をかけることになった。もう一つは、経費や人数の問題である。旅費・宿泊費など受講生の負担が大

きく、最終的に断念する受講生も出た。また、今回は適当な人数での渡米であったが、今後人数が増えた場合、引率教員や受け入れ学校の確保なども課題として残っている。これらについては、来年度、改善の方向で検討している。

最後に、今回の実施に当たっては、多くの人々にお世話になった。実施全般にわたって協力していただいたイーストカロライナ大学教育学部のレッドフォード先生、実習校であったエルムハースト小学校のスザン先生、ウォールコーツ小学校のワトソン先生、G. R. ウィットフィールド校のパム先生には心よりお礼を申し上げたい。また、研究助成をいただいた米日財団、実施に当たって支援をしていただいた大学院教育学研究科学生支援・教育研究活動支援の両グループにもお礼を申し上げたい。



写真4 ワシントンにて